

J Inclusive ournal of E ducation

Printed 2017.0830

Online ISSN: 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



“A house in the Zamami”
Megumi MIYACHIKA

August 2017 VOL. **3**

ORIGINAL ARTICLE

IN-Child Record に基づいた ADHD 傾向のある IN-Child に対する 指導法の分析

Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to ADHD

太田 麻美子¹⁾²⁾ (Mamiko OTA), 権 偕珍³⁾ (Haejin KWON)
小原 愛子^{1)*} (Aiko KOHARA)

- 1) 琉球大学教育学部
(Faculty of Education, University of the Ryukyus)
- 2) 琉球大学大学院教育学研究科
(Graduate School of Education, University of the Ryukyus)
- 3) 宮崎大学教育学部
(Faculty of Education, University of the Miyazaki)

<Key-words>

Inclusive Needs Child (IN-Child), IN-Child Record, 注意欠如多動症, 指導法
(Inclusive Needs Child(IN-Child), IN-Child Record,
Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder, teaching method)

*責任著者 : colora420@gmail.com (小原 愛子)

Journal of Inclusive Education, 2017, 3:1-17. © 2017 Asian Society of Human Services

ABSTRACT

Received
2017 / 7 / 17

IN-Child とは、包括的教育を必要とする全ての子どもを指す用語であり、IN-Child Record とは、IN-Child の QOL 向上の観点から支援ニーズを検討する為の 82 項目 14 領域で構成されているツールである。

Revised
2017 / 8 / 8

本研究では、IN-Child Record の 14 領域を用いて、既存の論文・学会発表における指導実践を分析することで、ADHD 傾向のある IN-Child に対して教育現場で行われている指導・支援方法を典型化し、課題を明らかにすることを目的とした。その結果、ADHD 傾向のある IN-Child に対する指導・支援として、①保護者と実施できる身体面に関する具体的かつ効果的な指導方法の必要性、②海外の文献も含めた ADHD の特性に特化した生活面に関する指導法の収集の必要性、③「聞く」に関する指導法と、ADHD の特性に特化した読み書き能力を高めていくため指導法の開発が必要であることが明らかになった。

Accepted
2017 / 8 / 10

Published
2017 / 8 / 30

I. 問題と目的

IN-Child(Inclusive Needs Child)とは、「発達の遅れ、知的な遅れまたはそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境などを要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子」と定義され(韓・太田・権, 2016)、包括的教育を必要とする全ての子どもを指す用語である。また、IN-ChildのQOL向上の観点から支援ニーズを検討する為のツールとして、IN-Child Recordが開発された(韓・太田・権, 2016)。

現在、包括的教育の対象として教育現場で課題となっているIN-Childとして、注意欠如・多動症(Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder: 以下、ADHD)と類似した傾向のある子ども達が挙げられている。例にとると、頻繁に離席や床に転がったり、机の上に載ってしまったなどの多動傾向から集団生活が困難である事例(吉田・都築, 2015)や、落ち着きがなく物に当たったりすることで交友関係を上手に築く事に課題のある事例(松本, 2014)などが挙げられる。それらの事例の中には、医療機関においてADHDと診断されている子どももいるが、診断されてはいないもののADHDの傾向がある子どもとして、指導における課題となっている。韓・矢野・小原ら(2017)は、IN-Child Recordを用いて、領域である「不注意」「多動性・衝動性」をADHD傾向モデルとして設定し、パス解析及び構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling: SEM)を使用して、ADHD傾向がIN-Child Recordの他の領域に与える影響を検証した。その結果、ADHD傾向が①生活面を潜在変数として「社会生活機能」と「コミュニケーション」の領域に影響を及ぼしていること、②「聞く」の領域に影響を及ぼしていること、③「書く」の領域に影響を及ぼしていること、④「計算する」の領域に影響を及ぼしていることが明らかになった。

ADHD傾向のIN-Childに関しては、教育現場では多くの教育実践が取り組まれている。論文や学会発表などにおいても様々な実践報告がなされているが、その指導方法に関しては典型化されていない。ADHD傾向のIN-Childは教育現場で多く見られ課題となっていることから、指導方法に関して典型化することは、今後のIN-Childの指導の方向性を決める材料になるだけでなく、指導法を開発する際の重要な資料になると考えられる。

そこで、本研究では、IN-Child Recordを用いて、論文・学会発表における指導実践をIN-Child Recordの領域と照らし合わせて分析することで、ADHD傾向のあるIN-Childに対して教育現場で行われている指導・支援方法を典型化し、課題を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 資料抽出方法

1) 文献抽出

Google Scholar、CiNiiで「ADHD and 指導」「ADHD and 指導法」で検索し、該当した資料の中から、以下の資料選定基準に基づいて、資料抽出を行った。

2) 資料選定基準

- ・インクルーシブ教育に関する答申(文部科学省, 2012)が発表された2012年以降であること
- ・対象になる児童生徒の学年が小学生か中学生であること

- ・ADHD の診断が記載されているもの、または記載されている児童生徒の実態を IN-Child Record の領域で対応させた際に「不注意」かつ「多動性・衝動性」に困難をもつ IN-Child の事例であること

2. 分析方法

教育実践事例を分析する際には、対象児童生徒の実態と指導・支援方法の2点に分け、IN-Child Record の領域を対応させて分析を行った。また、指導・支援に関する評価の実態も分析した(表 1)。

表 1 分析対象事例の分析項目

1	対象児童生徒	(1)児童生徒について	①学年 ②性別 ③診断と服薬
		(2)児童生徒の実態	①身体面 ア.身体の状態 イ.姿勢・運動・動作 ②情緒面 ア.不注意 イ.多動性・衝動性 ウ.こだわり エ.自己肯定感 ③生活面 ア.社会生活機能 イ.コミュニケーション ④学習面 ア.聞く イ.話す ウ.読む エ.書く オ.計算する カ.推論する
2	指導・支援方法	(1)指導・支援	①身体面 ア.身体の状態 イ.姿勢・運動・動作 ②情緒面 ア.不注意 イ.多動性・衝動性 ウ.こだわり エ.自己肯定感 ③生活面 ア.社会生活機能 イ.コミュニケーション ④学習面 ア.聞く イ.話す ウ.読む エ.書く オ.計算する カ.推論する
3	指導・支援に関する教育効果	(1)教育効果の記載	①記載されている ②記載されていない
		(2)客観的な評価ツールを使用しているか	①使用している→何を使用しているか 使用していない→評価はどのように行っているか

Ⅲ. 結果

Google Scholar、CiNii で 2012 年以降に発行された論文のみを抽出するよう条件付けをし、「ADHD and 指導」で検索した結果、合計 1,649 件(Google Scholar: 1,570 件, CiNii: 79 件)、「ADHD and 指導法」で検索した結果、合計 175 件(Google Scholar: 175 件, CiNii: 0 件)が該当した。その中から資料選定基準を満たす 20 件の資料(31 事例)を対象に、指導・支援方法の分析を行った。分析を行う際は、それぞれの事例に通し番号をつけ、分析を行った。

1. 対象児童生徒の分析

分析対象資料を、タイトル、著者、対象児に分けて分析した。分析した結果を表 2 に示す。対象児に関しては、性別、学年、診断・服薬、論文中に記載されていた児童生徒を IN-Child とし、実態を IN-Child Record の領域で対応させ、どの領域に困難をもつのかを分析した。また、1 つの論文で 2 つ以上の事例を取り扱っている資料については、対象児の文中の表記を記載し区別した。

1) 性別と診断の有無について

対象児童生徒の性別は男子 28 件、女子 3 件と男子が多かった。

診断の有無については、何らかの診断のある事例が 22 件、診断のない事例が 9 件であった。ADHD の診断のある IN-Child が 19 件(ADHD の診断を有していると表記されている事例 1)2)3)5)6)7)8)9)11)12)13)14)19)20)23)28)29)30)、服薬の記載から ADHD の診断を有していると思われる事例 4)、うち服薬している事例が 7 件 3)4)6)19)20)28)30)であった。

また、ADHD 以外の診断のある IN-Child が 6 件 15)24)25)26)28)30)、自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder: 以下、ASD)の診断のある児童生徒が 3 件 24)25)28)、限局性学習症(Specific Learning Disorder: 以下、SLD)の診断のある IN-Child が 2 件 24)30)であった。

2) IN-Child の実態と IN-Child Record の項目の対応分析

「身体の状態」に困難を抱える IN-Child の事例は 7 件であった。「身体の状態」主に虐待に関するチェック項目で構成されている(韓・太田・権, 2016)。そのため、身体的虐待やネグレクトを受けている事例 13)15)、母親が何らかの疾患を抱えている事例 23)、また、母子密着が見られる 30)など家庭環境が児童生徒に何らかの影響 3)を及ぼしていると表記されているものであった。

「姿勢・運動・動作」に困難を抱える IN-Child の事例は 5 件であった。姿勢の乱れについて表記している事例が 3 件 15)24)29)、微細運動なども含めた運動に不器用さを示している事例が 2 件 1)2)1)であった。

「不注意」には、ADHD の診断を有している事例の他に、ADHD の傾向・ADHD の疑いと表記している事例が 2 件 10)17)、注意散漫などの表記から注意集中の持続の困難が見られる事例が 6 件 4)14)15)18)29)31)であった。

「多動性・衝動性」は、ADHD の診断を有している事例の他に、多動傾向と表記されている事例が 4 件 4)12)14)26)であった。

「こだわり」に困難を抱える IN-Child の事例は 4 件であった。うち、ASD の診断が表記

されている事例の他に、部屋のベッドの周りにフィギアを並べている IN-Child の事例¹³⁾であった。

「自己肯定感」に困難を抱える IN-Child の事例は、8 件であった。自己肯定感・自己評価が低いと表記されている事例³⁾¹²⁾や、学齢児版 Child Behavior Checklist(保護者が記入)を使用した際に不安/抗うつ領域の数値が高く、自己肯定感が低いのではないかと考えられる事例²⁸⁾であった。

「社会生活機能」に困難を抱える IN-Child の事例は、5 件であった。身の回りの整理整頓が苦手であるなど持ち物の管理に課題のある事例²⁾²⁴⁾や、時間を守ることが困難である事例¹⁵⁾²⁷⁾をあてはめた。

「コミュニケーション」に困難を抱える IN-Child の事例は、14 件であった。ASD の診断が表記されている事例の他に、奇声をあげる、自分の言いたいことを言葉で表現できないなどの適切なコミュニケーション手段を選択・表現できない事例が7件¹²⁾¹⁵⁾¹⁸⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁹⁾³¹⁾であった。

「聞く」に困難を抱える IN-Child の事例は、5 件であった。やるべき課題が何か理解していない事例¹⁶⁾や理解が不十分で指示が通らない事例⁴⁾があった。

「話す」に困難を抱える IN-Child の事例は、1 件であった。正しく発音できないと表記されている事例⁷⁾であった。

「読む」に困難を抱える IN-Child の事例は 8 件、「書く」に困難を抱える IN-Child の事例は 11 件であった。読み書き両方に困難を抱える IN-Child の事例は 8 件¹⁾²⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾であった。

「計算する」に困難を抱える IN-Child の事例は 4 件、「推論する」に困難を抱える IN-Child の事例は 6 件であった。計算する、推論するの両方に困難を抱える IN-Child の事例は 4 件⁴⁾⁹⁾¹⁰⁾¹⁶⁾であった。

2. 指導・支援方法の分析

1) 身体面

「身体の状態」と「姿勢・運動・動作」に関する指導・支援を表3にまとめた。

「身体の状態」に関する指導・支援を行っている事例は、12件であった。そのうち、ペアレントトレーニングや親子の遊びの時間を設ける、親子で合同カウンセリングを設けるなど、親子関係に焦点をおいた指導・支援を行っている事例が9件⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁸⁾²⁰⁾、友人関係に焦点を置いた指導・支援が2件³⁾³¹⁾みられた。

「姿勢・運動・動作」に関する指導・支援を行っている事例は、2件であった。姿勢が崩れている際の声かけを行っている事例¹⁶⁾と、歩幅を利用し廊下の長さを測るなど身体を動かしながら学習する事例¹⁹⁾であった。

表3 身体面に関する指導・支援の対応分析結果

IN-Child Recordの項目	指導・支援	資料の 通し 番号
身体の状態	・リレーションを目的に、ペアでの相談タイムを設け、友だち同士で考えあう時間をとる	3)
	・個別のペアレントトレーニング	5)6)7)8)
	・親子の遊びの時間、プレイセラピー、親面接	12)
	・IN-Childが、母について言及した際に、母との関係を悪化させないためにIN-Childに共感・フォローする	14)
	・トレーナー、トレーニーとの交流 ・動作訓練として、肩、腰、座位、膝立ち、髀幹の捻り、腕あげ、ぎっこんばったんなどのリラクゼーション訓練	15)
	・母親と連携し、睡眠時間を確保する働きかけをする	16)
	・親子合同カウンセリング	18)
	・スキンシップの充実 感情が高ぶって不安定になっている時には、手を握る、抱きしめる等のスキンシップを意識的に行う	20)
	・医療機関、福祉機関と連携を図り、家庭支援をしていく	
	姿勢・運動・動作	・他の児童らの名前を呼んで風船をトスしあう ・ペアになって役割の違うものを表現する ・2～4人で手つなぎ、ぬいぐるみをつかむ
・姿勢が崩れていたとき、声をかける。「背筋を伸ばす」などの教示カードを示す		16)
・歩幅を測って、廊下を歩いて歩数を数えさせ廊下の長さを計算する ・床の広範囲にカルタカードを並べて、走って取りに行く		19)

2) 情緒面

「不注意」、「多動性・衝動性」、「こだわり」、「自己肯定感」に関する指導・支援を表4にまとめた。

「不注意」に関する指導・支援を行っている事例は、6件であった。そのうち4件¹³⁾¹⁴⁾¹⁹⁾²⁰⁾が、対象となるIN-Childの興味・関心に即した教材・作業を行っている事例であった。

「多動性・衝動性」に関する指導・支援を行っている事例は、4件であった。そのうち3件³⁾²³⁾²⁴⁾が多動性・衝動性に関する内容をルールとして設定している事例であった。

「自己肯定感」に関する指導・支援を行っている事例は、6件であった。そのうち、4件¹⁾²⁾¹³⁾²⁰⁾が頑張りカードとシールを利用したトークンエコノミーであった。

表4 情緒面に関する指導・支援の対応分析結果

IN-Child Recordの項目	指導・支援	資料の 通し 番号
不注意	・机上には何も出さず、その時必要な物を必要な時に素早く用意することをルールとして設定する	3)
	・タイマーを活用して学習活動にメリハリをつける	
	・好きな作業をさせる	13)
	・好きな作業をさせる	14)
	・本人の興味のある分野を教材に取り入れる工夫をする	19)
	・興味・関心を活かした学習	20)
多動性・衝動性	・持ち物の確認、配置を決める	24)
	・暴言や暴力をふるわないことを遊びのルールとして設定する	3)
	・遊びの後で、「なぜルールが必要なのか」を考えさせる	
	・SSTの題材として怒りのコントロールを取り扱う	12)
	・授業中、授業に関係ないことは発言しないことをルールとして設定する	23)
こだわり	・授業中、先生の話は最後まで聞くことをルールとして設定する	24)
	・授業中、大きな声をださないことをルールとして設定する	
自己肯定感	特になし	
	・トークンエコノミー：頑張りシールを貼る	1)2)
	・班構成の際に、IN-Childの頑張りを認め、言葉かけができる友だちを同じ班にする	3)
	・IN-Childの頑張りを認める	
	・IN-Childの活躍の場を作る	
	・何かあればすぐ褒める	13)
・トークンエコノミー		
自己肯定感	・成功体験を増やし、自尊感情を高める	19)
	・トークンエコノミー：頑張りカードの使用	
	・自立活動の中で、心理的な安定を扱う	20)
	・活動の際に不安な時には、おまもりを1つもって行ってよいことにする	

3) 生活面

「社会生活機能」、「コミュニケーション」に関する指導・支援を表5にまとめた。

「社会生活機能」に関する指導・支援を行っている事例は、7件であった。スケジュールカードなどを使用し、見通しを持たせるようにしている事例が4件¹⁾²⁾¹⁶⁾²⁰⁾であった。また、発言の際の手順や挨拶などに関する内容をルールとして設定している事例が2件²²⁾²⁶⁾であった。

「コミュニケーション」に関する指導・支援を行っている事例は、8件であった。そのうち、社会的スキル訓練(Social Skills Training: 以下、SST)を実施している事例やそれに類似する実践をしている事例が5件³⁾¹²⁾²⁸⁾³⁰⁾³¹⁾であった。

表5 生活面に関する指導・支援の対応分析結果

IN-Child Recordの項目	指導・支援	資料の 通し 番号
社会生活機能	・本時の流れをスケジュールカードで示す	1)2)
	・本日の学習課題を黒板にかき、全体に知らせる	16)
	・やるべき活動内容を事前に示し、見通しを持たせる	20)
	・授業中、発言したいときには挙手し、その後先生から指名された場合に限り発言できることをルールとして設定する	22)
	・持ち物を確認、配置を決める	24)
	・社会科見学の際に、挨拶をしっかりとする、お店の人の仕事の邪魔になるようなことはしない事をルールとして設定する	26)
コミュニケーション	・トラブルを起こした際には「話を最後まで聴く」「一度は本人の気持ちをすべて受け止める」、「個別に話す時間を持ち、本人の気持ちを整理する」指導をする	3)
	・隣の生徒に書記が難しいときに、書けるようにおねがいを。また、働きかけてくれた生徒にねぎらいの言葉をかける指導をする	12)
	・自立活動の中で、人間関係の形成、コミュニケーションを扱う	16)
	・学級担任がホワイトボードを使用して情報の可視化	20)
	・トラブルや注意事項を事前に抑え、一緒に対策を考える	25)
	・SSTの指導	28)
	・小集団の対人関係づくりに関するSST、大集団の対人関係づくりに関するSST	30)
	・適切な聞き方や伝え方：定型的な聞き方や伝え方の学習、分かりやすい聞き方や伝え方の練習	31)
	・定型的な理由の伝え方の学習、意見と理由を伝える実践的な練習	
	・工夫したところをお互いに伝え合う、他者と協力して活動する	

4) 学習面

「聞く」、「話す」、「読む」、「書く」「計算する」、「推論する」に関する指導・支援を表6にまとめた。

「聞く」に関する指導・支援を行っている事例は、4件であった。明確に、教師が具体的に、短い指示をだすことを意識している事例が2件³⁾¹⁹⁾、また、最後まで話を聞くことをルールとして設定している事例が2件²⁴⁾²⁵⁾であった。

「話す」に関する指導・支援を行っている事例は、3件であった。伝えたい内容を整理する事²⁹⁾³¹⁾、伝え方を練習する事例²⁰⁾²⁹⁾³¹⁾であった。

「読む」「書く」に関する指導・支援を行っている事例は、6件であった。「読む」に関しては、分かち書き文を作成している事例が6件¹⁾²⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾であった。「書く」に関しては、漢字をマス目を書く練習¹⁾²⁾や、漢字をイラスト化⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾するなど、SLD傾向に対する指導中心となっていた。

「計算する」に関する指導・支援を行っている事例は、3件であった。3件⁴⁾⁹⁾¹⁰⁾とも、計算方法をスモールステップ化し、提示している事例であった。

「推論する」に関する指導・支援を行っている事例は、5件であった。5件⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾¹⁷⁾とも、「だれが・なにを・いつ・どこで・どうした」の5W1Hにわけて考える事例であった。

表6-1 学習面に関する指導・支援の対応分析結果

IN-Child Recordの項目	指導・支援	資料の 通し 番号
聞く	・教師の明確な言葉、わかりやすい指示、発問をする	3)
	・簡潔に短く、具体的にわかりやすい指示を出すこと	19)
	・先生の話は最後まで聞くことをルールとして設定する	24)
	・話は最後まできちんと聞くことをルールとして設定する	25)
話す	・スピーチタイム等を活用し、穏やかな話し方や素直な受け答えの練習	20)
	・自分の伝えたいこと言いたいことを整理し、読み手に伝える工夫を身に着ける事を目指して支援する	29)
	・定型的な聞き方や伝え方の学習、分かりやすい聞き方や伝え方の練習「伝える」の実践的な練習をする	31)
読む	・【読む】非分かち書き文、分かち書き文、一行一文飾文の順に行う 小冊子を自分でめくっての音読。読み方のわからない漢字に遭遇した時には、そのつど指導者が読み方を教える。	1)2)
	・分かち書き法 →文章中に書き表せる単語ごとにスペースを入れ、単語を認知しやすくし、分の切れ目を見やすくする方法 ・スリットの使用 →読む行のみ、スリットの隙間に見えるような補助具を用いて、読む場所に視点を集中できるようにする方法 ・リピート音読 →指導者が読んだ分を同じように後をついて読む方法。対象児の読みのスピードに合わせて行う。 ・リライト教材の活用 →リライト教材とは、対象児の読みの状態に応じて、漢字をひらがなに変えたり、ルビを振ったり、複雑な構文を簡素化したり、内容を変えずに文章量を減少させたりして作成した教材である。	5)6)7)8)
書く	・市販のワークシートを使用し指導。 第1.2 セッション：助詞「を」「は」を選ぶ練習、 第3 セッション：拗音、促音を書く練習をさせた。 第4.5 セッションで：1年配当漢字8字を7マス内を書く練習	1)2)
	・視覚法（漢字をパーツに分解し、それを合体して覚える） →対象児が各自でパーツに分解し、それをパズルのように合体させて学習したり、漢字の足し算としてつなぎ合わせたりする方法 ・イラスト漢字法 →漢字に意味のあるイラストを書き入れ、意味として覚える方法 ・聴覚法 →漢字の成り立ちを音声言語化して覚える方法 ・語呂合わせ法 →漢字の特徴を音声言語化、符号化して覚える方法	5)6)7)8)

表 6-2 学習面に関する指導・支援の対応分析結果

IN-Child Recordの項目	指導・支援	資料の 通し 番号
計算する	<ul style="list-style-type: none"> ・計算をする際に以下の手順で行う ①口に出して問題文を読む、 ②問題文に線を引く (分かっていること→青、条件&キーワード→黄、求めるもの→ピンク) ③数字の単位を合わせる(変換する) ④図(物)を動かして確認する ⑤+、-、×、÷のどれを使うか決める ⑥式を立てる(書く) ⑦式をとく ⑧求める数字の単位にする(変換する) ⑨答えを9つの手順を示した。 	4)
	<ul style="list-style-type: none"> ・以下の手順で指導を行う ①簡単な分数 <ul style="list-style-type: none"> ・粘土を切って量ることから出発して、分けることの体験から、分数を実感的に理解させる。 ②分母と分子 <ul style="list-style-type: none"> ・分母と分子を絵で表現して、分母と分子がもつ意味を視覚的に知らせる ・絵カードを組み合わせて分数が表せたイメージと読み方を考えさせる ③分数の足し算・引き算 <ul style="list-style-type: none"> ・式と式を絵で表現した計算式のカードを使って、計算の仕方をわかりやすく示す ・視覚的な手掛かりとして、記号に着目させることによって、計算の仕方を習得させる。 ④分数と少数・整数の関係 <ul style="list-style-type: none"> ・1本の拡大した数直線の上に、分数と少数、整数の相対位置を表してわかりやすく示す ⑤等しい分数 <ul style="list-style-type: none"> ・1つのものを感覚的に分けることを通して、大きさの等しい分数を実際につくってみる ⑥約分と通分 <ul style="list-style-type: none"> ・式と式を絵で表現したカードを使って、約分・通分の仕方をわかりやすく示す。 ・使用頻度の高い素数の倍数表を使って、約分・通分との関係を視覚的に示す。 ⑦分数の掛け算・割り算 <ul style="list-style-type: none"> ・折り紙を分けることを通して、分数の掛け算と割り算の計算を実際に操作している。 	9)10)
推論する	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を読む際に5W1Hに分けて抽出する 	5)6)7)8)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ステップを6段階に分け、文章を書く(5W1H) 1. 劇：だれが、何を、どうした 2. 劇：だれが、何を、どうした 3. 劇：だれが、何を、どうした、いつ 4. 劇：だれが、何を、どうした、いつ、どこで 5. セッション内：だれが、何を、どうした、いつ、どこで 6. セッション前：だれが、何を、どうした、いつ、どこで 	17)

3. 指導・支援方法の教育効果

教育効果の記載がされている事例が 25 件、記載されていない事例が6件⁶⁾⁷⁾⁸⁾¹³⁾¹⁴⁾²¹⁾であった。

記載されている事例のうち、客観的な評価ツールを使用している事例が 11 件であった。そのうち、テストを行い点数の変化について記載があった事例が 5 件¹⁾²⁾⁹⁾¹⁰⁾²⁹⁾であった。それ以外は、クラス全体での取り組みから学級満足度尺度を使用している事例が 1 件³⁾、生理的指標としてパルスオキシメーター、心理的指標としてストループ検査・MHPC 検査を使用している事例が 1 件¹⁶⁾、WISC-IIIや K-ABC などの知能検査を使用している事例が 2 件¹⁹⁾³⁰⁾、Questionnaire-Children with Difficulties (QCD)と心理社会的な適応/不適応状態を包括的に評価する尺度 Child Behavior Checklist (CBCL)を使用している事例が 1 件²⁸⁾、算数文章題

の躰きをアセスメントできる COMPASS(Componential Assessment for basic competence and study skills in mathematics)を使用している事例が 1 件⁴⁾であった。

記載されている事例のうち、客観的な評価ツールを使用していない事例が 14 件であった。14 件⁵⁾¹¹⁾¹²⁾¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾²⁰⁾²²⁾²³⁾²⁴⁾²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾³¹⁾全てが行動変化について記載していた。

IV. 考察

1. 身体面に関する指導・支援について

身体面に関する指導・支援については、「身体の状態」においては親子関係に焦点をおいた指導・支援、「姿勢・運動・動作」に関しては声掛けなどの一時的な対処となる支援方法が見られた。

ADHD の姿勢・運動・動作に関して、ADHD の協調運動の問題に関する研究は、1998 年頃から多く発表されている(Gillberg, 1998; Piek, Pitcher and Hay, 1999)。Fliers, Rommelse and Vermeulen ら(2008)は、大規模調査の結果から、男女いずれにおいても 3 分の 1 の ADHD 児が何らかの協調運動の問題であるという結果を示し、この協調運動の問題が日常生活になんらかの悪影響を及ぼしていることを示唆している。IN-Child Record の「姿勢・運動・動作」の領域も発達性協調運動障害の先行研究を参考にしている(韓・太田・權, 2016)ことから、この領域が低い場合は、日常生活において協調運動の課題があることが考えられる。つまり、ADHD やそれに類似する傾向を見せる IN-Child への、身体面に関しては、発達性協調運動障害に対する指導法も参考にしながら、身体の動かし方と身体意識能力に焦点をおいたバランス・敏捷性・巧緻性に関する指導・支援を行っていく必要があると思われる(澤田・古賀・田中, 2008)。

また、親子関係や友人関係に焦点をおいた指導・支援が多いことから、IN-Child の周囲に関係する人々も含めて実施できる身体面に関する指導・支援方法を開発することで、IN-Child に対してより効果的な教育を行えることが予想される。

加えて、心と身体は相互依存的事であることから(外山, 2014)、身体面にアプローチしていく事で情緒面、学習面、生活面に副次的に効果を与えることも可能ではないかと考えられる。

2. 生活面に関する指導・支援について

生活面に関する指導・支援については、「社会生活機能」においては、スケジュールカードなどを使用し、見通しを持たせるようにしている事例が多く見られ、「コミュニケーション」に関する指導・支援に関しては SST を実施している事例やそれに類似する実践をしている事例が多く見られた。SST については、問題点が多く指摘されており、特に、SST 後の般化について、その難しさが指摘されている(佐藤・佐藤・高山, 1993)。また、SST は ASD の子どもにも多く実践されていることから、ADHD の社会的課題に特化した指導法ではなかったのではないかと考えられる。

しかしながら、韓・矢野・小原ら(2017)の結果からも、ADHD 傾向が社会生活機能やコミュニケーションの領域に影響していることは明らかになっている為、ADHD 傾向の IN-Child に特化した社会生活機能やコミュニケーションの指導法は必要であろう。今回、日本の文献のみを分析対象としたため、今後海外の文献や教育実践も含めて効果的な指導法を収集する必要がある。

3. 学習面に関する指導・支援について

学習面に関する指導・支援については、「聞く」に関する指導・支援を行っている事例は、教師が具体的に、短い指示をだすことを意識している事例や最後まで話を聞くことをルールとして設定している事例など一時的な対処となる指導・支援がほとんどであった。

今回、児童生徒の実態を分析した結果からも、「聞く」に困難を抱える ADHD 傾向の IN-Child は、不注意による聞き逃しから理解が不十分で指示が通らないことが考えられ、その結果、他の学習領域に遅れが出てくるのではないかということが予想される。そのため、ADHD 傾向のある IN-Child にとって今後、「聞く」に対する教育的アプローチしていく事が重要になると考えられ、ADHD 傾向に特化した「聞く」指導が必要ではないかと考えられる。

また、「読む」「書く」に関する指導・支援を行っている事例は、「読む」「書く」どちらも SLD 傾向に対する指導が多く見られた。ADHD と SLD については約 45%と高いパーセンテージで併存疾患率が挙げられてはいる(DuPaul, Gormley and Laracy, 2013)。しかしながら、SLD と ADHD はどちらも読む事に困難を示す場合が多い。特に学習場面において深刻な影響を与えていることが明らかになっており、どちらも似たような特性を示すが、ADHD の場合は、不注意などから副次的に読む事に困難を示している可能性がある(Christina and Emma, 2015)。そのため、「聞く」にアプローチをしながら、「読む」「書く」能力を高めていくための ADHD の特性に特化した「読む」「書く」の指導法を開発していく必要がある。

4. 総合考察

IN-Child Record の観点から指導法を分析・開発することは、その子どもの特徴を詳細に把握し、効果的な指導を行うことにつながると考えられる。本研究では、IN-Child の指導・支援について、IN-Child Record と実践論文を対応分析してきた。ADHD 傾向の IN-Child は、ASD 傾向や SLD 傾向を併せる場合もあり、指導実践は ADHD 傾向に特化した指導がなされていないことが課題として明らかになった。これらのことから、ADHD の特徴を考え、より効果的な指導法を開発する必要があるといえる。また、本研究では、日本国内の論文として公開されている教育実践を分析したため、今後は、国内の教育実践の資料や海外の論文を調べることで、ADHD に特化した指導法を探索する必要があるだろう。

文献

- 1) 韓昌完・太田麻美子・權偕珍(2016) 通常学級に在籍する IN-Child (Inclusive Needs Child: 包括的教育を必要とする子) Record の開発. *Total Rehabilitation Research*, 3, 84-99.
- 2) 松本秀範(2014) 学校適応に困難さを抱える男児の行動観察と行動変容: 学校と連携しながら行った親子合同カウンセリングの事例. 福岡県立大学心理臨床研究, 6, 119-128.
- 3) 吉田優英・都築繁幸(2015) ADHD 児の学習指導に関する事例的考察, 障害者教育・福祉学研究, 11, 97-105.
- 4) 韓昌完・矢野夏樹・小原愛子・權偕珍・太田麻美子・田中敦士(2017) IN-Child Record の信頼性及び構成概念妥当性の検証—横断データを用いた分析—. *Total Rehabilitation Research*, 5, 1-14.
- 5) 文部科学省(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告).
- 6) Gillberg C(1998) Hyperactivity, inattention and motor control problems: Prevalence, comorbidity and background factors. *Folia Phoniatica et Logopaedica*, 50, 107-117.
- 7) Piek JP, Pitcher TM & Hay DA(1999) Motor coordination and kinaesthesia in boys with attention deficit-hyperactivity disorder. *Developmental Medicine and Child Neurology*, 41, 159-165.
- 8) Fliers E, Rommelse N, Vermeulen SH, Altink M, Buschgens CJ, Faraone SV, Sergeant JA, Franke B & Buitelaar JK(2008) Motor coordination problems in children and adolescents with ADHD rated by parents and teachers: effects of age and gender. *Journal of Neural Transmission*, 115(2), 211-20.
- 9) 澤田蘭・古賀精治・田中通義(2008) 発達性協調運動障害のある児童に対する運動指導の効果. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 30(2), 157-170.
- 10) 外山紀子(2014) 心身相関的理解の現象依存性. 日本認知心理学会発表論文集, 日本認知心理学会第 12 回大会, 34.
- 11) 佐藤容子・佐藤正二・高山巖(1993) 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練 —コーチング法の使用と訓練の般化性—. 行動療法研究, 19, 13-27.
- 12) DuPaul GJ, Gormley MJ & Laracy SD(2013) Comorbidity of LD and ADHD: implications of DSM-5 for assessment and treatment. *Journal of Learning Disability*. 46(1), 43-51.
- 13) Christina Gray & Emma A. Climie(2016) Children with Attention Deficit / Hyperactivity Disorder and Reading Disability: A Review of the Efficacy of Medication Treatments. *Frontiers in Psychology*, 7, 988.

分析対象資料

以下、表 2-1,2 に記載した通し番号順に分析対象資料を記す。

- 1). 岩永久子・綿巻徹・笹山龍太郎(2012) 読みに困難のある児童への読みの指導の実践研究. 教育実践総合センター紀要, 11, 289-298.
- 2). 1).と同様
- 3). 曾山和彦・堅田明義(2012) 発達障害児の在籍する通常学級における児童の学級適応に関する研究 ―ルール、リレーション、友だちからの受容、教師支援の視点から―. 特殊教育学研究, 50(4), 373-382.
- 4). 宇田川真智子・松本秀彦(2012) LD 傾向のある児童における算数文章題指導 ―COMPASS による躰きの分析に基づく文章概念化を援助する教材を用いて―. 作大論集, 2, 249-260.
- 5). 富永由紀子・池本喜代正・石川泰子・押野ゆき子・高橋里子・田島成子・青柳都己代・加藤麻未(2013) 学習障害児に対する個別学習支援の在り方に関する一考察 ―大学におけるセッション指導から―. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 36, 339-346.
- 6). 5).と同様
- 7). 5).と同様
- 8). 5).と同様
- 9). 熊谷恵子(2013) 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書. 課題番号 22531057.
- 10). 9).と同様
- 11). 関暁子・五十嵐元子・市川奈緒子(2013) 子どもに添う教材作成と学習支援の可能性 ―書字困難を抱える児童の事例から―. 白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報, 18, 15-26.
- 12). 浅井美紗・小平かやの・大澤眞木子(2013) 情緒的な問題を持つ attention-deficit / hyperactivity disorder の子どもに対する心理的介入の工夫について. 東京女子医科大学雑誌, 83, 臨時増刊, E415-E421.
- 13). 米澤好史(2013) 愛着障害・発達障害への「愛情の器」モデルによる支援の実際. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 63, 1-16.
- 14). 13).と同様
- 15). 長井裕美・鼻地勝人(2013) 親からの虐待を受けた子ども達への動作法による支援 ―心理的・生理的指標を用いたファミリーホームにおける被虐待児の行動の変容の検証―. 中村学園大学発達支援センター研究, 4, 19-32.
- 16). 宮本美奈子(2014) 中学校通常の学級における行動コンサルテーションを用いた発達障害のある生徒への学習指導. 教育実践研究, 24, 253-258.
- 17). 坂本佳菜・高浜浩二(2014) P2-07 ADHD 児に対する 5W1H に基づいた段階的な作文指導の効果(ポスター発表 II). 日本行動分析学会年次大会プログラム・発表論文集, 32.
- 18). 松本秀範(2014) 学校適応に困難さを抱える男児の行動観察と行動変容: 学校と連携しながら行った親子合同カウンセリングの事例. 福岡県立大学心理臨床研究, 6, 119-128.

- 19). 吉田優英・都築繁幸(2015) ADHD 児の学習指導に関する事例的考察, 障害者教育・福祉学研究, 11, 97-105.
- 20). 原山明子(2015) 愛着形成に問題を抱える児童の学校生活適応への支援の在り方: 子どもの特性に応じた支援方法や指導体制の工夫に取り組んだ実践を通して, 教育実践研究, 25, 235-240.
- 21). 岡本康哉・原田唯司(2015) 子ども自身の行動の振り返りを促す生徒指導, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 23, 205-211.
- 22). 21).と同様
- 23). 21).と同様
- 24). 都築繁幸・兵藤義信・伊藤ゆかり・牧野忠和・牧野恒夫・水野清彦・水鳥正美・武藤敬治・長屋典子・野本宏奈・佐藤理美・白井快典(2016) 通級指導教室と通常の学級の連携による支援ー通級指導教室対象児の校外学習の指導を中心にー, 障害者教育・福祉学研究, 12, 87-98.
- 25). 24).と同様
- 26). 24).と同様
- 27). 24).と同様
- 28). 東昌美・武田鉄郎(2016) 発達障害のある子どもの成長過程における教育的支援のあり方に関する実証的研究: 日常生活チェックリストと身体活動量を活用して. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 67, 43-50.
- 29). 平山太市・勝二博亮(2016) 読み困難を示す ADHD 児への文章作成による言語表現の支援, 茨城大学教育実践研究, 35, 193-204.
- 30). 早田聡宏・東晃子・中村みゆき・中西大介・西田寿美(2016) 学習障害, 注意欠如・多動性障害および母子密着を背景とした長期不登校児童への入院治療: あすなろ学園での18カ月間の療育的かかわりと経過, 児童青年精神医学とその近接領域, 57(5), 808-828.
- 31). 高野光司・遠田将大(2017) 小学生の親子に対するソーシャル・スキルの指導に関する事例研究, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊, 24(2), 31-41.

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)



Aiko KOHARA University of the Ryukyus (Japan)	Mika KATAOKA Kagoshima University (Japan)
Aoko CHINA National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)	Mikio HIRANO Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)
Eonji KIM Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)	Nagako KASHIKI Ehime University (Japan)
Haejin KWON Ritsumeikan University (Japan)	Shogo HIRATA Ibaraki Christian University (Japan)
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University (Japan)	Takahito MASUDA Hirosaki University (Japan)
Iwao KOBAYASHI Tokyo Gakugei University (Japan)	Takashi NAKAMURA University of Teacher Education Fukuoka (Japan)
Kazuhito NOGUCHI Tohoku University (Japan)	Takeshi YASHIMA Joetsu University of Education (Japan)
Keita SUZUKI Kochi University (Japan)	Tomio HOSOBUCHI Saitama University (Japan)
Kenji WATANABE Kio University (Japan)	Toru HOSOKAWA Tohoku University (Japan)
Kohei MORI Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)	Toshihiko KIKUCHI Mie University (Japan)
Liting CHEN Sophia School of Social Welfare (Japan)	Yoshifumi IKEDA Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education

VOL.3 August 2017

© 2017 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education

VOL.3 August 2017

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Analysis of Teaching Method for IN-Child Showing Behavior Similar to ADHD.....**Mamiko OTA**, et al. 1

Factors Affect Assessment of Educational Outcome about
Social Function for Children with Intellectual Disabilities.....**Natsuki YANO**, et al. 18

Research on Recognition of Teacher's Expertise in Hearing Impairment Education:
Focus on Expertise such as Curriculum, Teaching Method and Characteristics and Psychology.....**Kohei MORI**, et al. 25

REVIEW ARTICLE

Literature Research about the Support of Self-understanding and Career Decision-making
for High-school and University Students with Developmental Disorders..... **Hiroataka KUWAKI**, et al. 38

SHORT PAPERS

The Verification of Reliability and Validity of Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT) for Standardization:
Based on the Data from Tochigi Prefecture.....**Haena KIM**, et al. 50

Reasonable Accommodations Required by Physically Handicapped Children Enrolled in Regular Classes:
A Study on Discomfort and Inconvenient Circumstances and Their Corresponding Accommodations
..... **Osamu ISHIDA**. 57

Survey on Information Disclosure Status of Disability Student Support Policy at National Universities:
Mainly on Information on the Homepage..... **Takeshi ODAGIRI**, et al. 65

ACTIVITY REPORTS

The Transformation of Thoughts and Feelings of the Siblings of Severely Handicapped Children and the Surrounding People:
Interviews with Siblings during Adolescence..... **Ayaho OCHI**, et al. 77

The Practical Study of the Systematical Life Unit Learning from 1st to 12th Grade of Special Support School:
Class Planning by Utilizing Career Development Support..... **Nagako KASHIKI**, et al. 87

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan